

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520207

研究課題名(和文) 日本近現代文学における日米関係の表象の研究

研究課題名(英文) Study of the Presentation of the Relation between Japan and United States in Japanese Modern Literature

研究代表者

柴田 勝二 (Shibata, Shoji)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80206135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本科研では日本近現代文学において「アメリカ」ないし日米関係がどのように表象されているかという問題について、現代の代表的作家でありまたアメリカ文学の優れた翻訳者でもある村上春樹を主な対象として探求した。その成果としては2014年11月13日に、著名な文芸評論家である加藤典洋氏、千石英世氏、およびアメリカから日本文学研究者であるマシュー・ストレッカー氏を招いてシンポジウム「戦後日本文学とアメリカ」を開催し、盛況のうちに終えることができた。また2015年2月には村上春樹の文学世界を、研究代表者を含む内外の研究者が多角的に捉えた『世界文学としての村上春樹』を本学出版会より刊行した。

研究成果の概要(英文)：We studied about how the relation between Japan and United States has been represented in Japanese modern literature focusing on Murakami Haruki, a representative author of Japan who is well known throughout the world and an excellent translator of American literature. As the result of the study, we held a symposium titled 'Postwar Japanese Literature and America' inviting famous critics and scholars as panelists, in which lively discussions were held between panelists and audience. And we published a book on the literature of Murakami Haruki titled Murakami Haruki as World Literature from our university press inviting national and foreign scholars as authors.

研究分野：日本近代文学

キーワード：戦後日本文学 日米関係 村上春樹 創作と翻訳

### 1. 研究開始当初の背景

戦後日本の社会は日米安全保障条約によるアメリカへの軍事的従属の下に置かれて来、文学もその体制の影響を様々に映し出してきた。1950年代、60年代には三島由紀夫と大江健三郎を中心として、国としての自律性を喪失した、あるいは確保しえない状況として戦後日本を批判的に眺める視点を基底にもつ作品が多くもたらされた。「第三の新人」の中心的作家であった小島信夫の作品には、「アメリカ」に浸透された環境として戦後日本の家庭が揶揄とユーモアを込めて描かれている。

しかしこうした「アメリカ」の政治的、文化的な力によって自律性を脅かされ、それに対して焦慮や憤りを覚えるという様相は70年代以降の文学作品では支配的ではなくなっていく。加藤典洋の『アメリカの影』ではその変容が問題化されており、70年代半ばに現れた村上龍の『限りなく透明に近いブルー』では、まだ「アメリカ」の浸透を批判的に眺める視点が主軸をなしているのに対して、田中康夫の『なんとなく、クリスタル』ではアメリカをはじめとする西洋文化の受容を当然のこととし、そこであえて「日本」の自律性を求めない流れが明確化されているという論点が提示されている。

彼らの後に70年代に登場した村上春樹においては、「アメリカ」との関係を批判的に捉える視点はさらに後退しており、むしろそれに浸透された状態を自明視するところから表現がおこなわれている。村上がアメリカ文学の翻訳者でもあることからうかがわれるように、アメリカの文化や文学、あるいはその生活や思考形態は村上春樹の文学の着想をなしている。こうした日本における「アメリカ」の政治的存在とその文化影響が戦後どのように変化していったか現在に至ったかはまだ十分に探求されていない。こうした状況に鑑み、あらためて戦後日本とアメリカとの関わりを捉え直す必要があると思われた。

#### 1. 研究の目的

サンフランシスコ講和条約とともに結ばれた日米安保条約の体制下におけるアメリカへの軍事的従属が持続する状況は、それ自体は現在に至るまで持続されているにもかかわらず、それに対する批判・告発を旨とする文学作品は三島由紀夫が不在となった70年代以降目立たなくなっていく。一方両村上や田中康夫の作品に見られるように、それを受容することを自己の拠点とするかのような作家が登場するようになった。またアメリカ国籍の黒人との交わりを多く描く山田詠美の作品では、女性の立場から逆にアメリカ人を庇護する姿勢を持つ人物が多く登場する。両村上とともに現代文学の中心的な担い手となった中上健次の作品においても、アメリカへの屈折した意識が表出されることはほとんどない。こうした変化が70年代な

かば以降の文学作品の表現において生じてきたのはなぜなのか、ということがあらためて問われる必要がある。その際考慮に入れる必要があると思われるのは、60年代の三島、大江らまでの時代とは異なり、アメリカに代表される欧米諸国だけでなく、中国・韓国といったアジア諸国の存在と、それらとの歴史的関わりが次第に前景化されていったという事情である。60年代くらいまではさほど日本人の意識の中心を占めていなかった近隣アジア諸国との関係に心を砕かねばならなくなった状況では、これまでのように安保体制下におけるアメリカとの関係を中心的な問題とすることが非現実的になってきた。それを傍証するように、村上春樹や中頭健次の作品では、中国や韓国との関わりがモチーフ化されたものが少なくない。

現代文学において次第にアメリカとの関係が比重を低めていくように見えるのは、こうした日本をめぐる世界情勢の多極化という趨勢によるところが大きい。現実には現在アメリカの世界における政治的支配力は低減しつつある。こうした現代の状況下にもたらされた文学作品にはどのような日米の関わりが表象されているのか、そしてそれは何を物語るのか、そうした問題を明らかにすることを目的として想定した。

### 3. 研究の方法

高校生時代からアメリカ文学になじみ、アメリカの現代小説を読むことで作家としての表現方法を身につけていったともいえる村上春樹は、同時に日本のみならず海外でも高い人気を持つ「日本作家」として認知されている。アメリカでの生活経験も長く、現代における日本とアメリカの関係を肌で感じ取っている作家でもある。この村上春樹を主たる対象として、70年代以降のポストモダンの時代において日本人は「アメリカ」をどのように意識し、表現してきたのかを探っていく。

この問題に関する貴重な先行論として加藤典洋氏の『アメリカの影』があるが、ここで提示されていた、村上龍の作品においては「アメリカ」の排除が打ち出されていたのに対して、田中康夫の作品ではその無批判な受容が示されているといった把握は、果たして現在でも有効なのかを確認していく必要がある。また大江健三郎や小島信夫といった、50年代、60年代の活動においては対アメリカの関係を重要なモチーフとしていた作家たちは、70年代以降の表現活動においてどのような変容を遂げたのか。そうした問題を研究代表者、研究協力者の個々の課題として探っていくとともに、そうした問題に精通した評論家、研究者を招いてシンポジウムを開催し、また内外の研究者からの論考を集めた論文集を刊行することで掘り下げ、公に問いかける。

## 2. 研究成果

上記の問題を探究するべく、2014年12月13日に文芸評論家加藤典洋氏、千石英世氏、ウィノナ州立大学教授マシュー・ストレッカー氏を招き、東京外国語大学AA研究所大会議室にてシンポジウム「戦後日本文学とアメリカ」を開催した。ここでは加藤氏がかつての論考『アメリカの影』と、近著である『30年後のなんとなく、クリスタル』を紹介し、それを鍵としてアメリカ文学の専門家であり、小島信夫の研究者として著名な千石氏、アメリカの村上春樹研究者であるストレッカー氏、および研究代表者の柴田がそれぞれの研究主題に沿った発表をおこない、活発な議論が交わされた。

また研究期間である3年間にわたる課題である、村上春樹文学を学際的な視点から捉える論文集を刊行するという事業については、2015年2月に研究代表者と研究協力者の編による論文集『世界文学としての村上春樹』を東京外国語大学出版会より刊行した。ここでは研究代表者、研究協力者の論考を含む、アメリカ、フランス、台湾、韓国など内外の研究者からそれぞれ問題意識に満ちた興味深い論考を収載することができ、研究の末尾を飾るにふさわしい成果を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1 柴田勝二「テロリズムと私小説 リービ英雄の表現と『千々にくだけて』」(『総合文化研究』17号, 40-53頁, 2015年3月)

2 柴田勝二「漱石と徴兵忌避 表現者としての起点」(『季論』21, 25号』83-97頁, 2014年7月)

3 柴田勝二「「非我」のなかの「真」 『三四郎』『それから』の「空気」と「気分」」, (『総合文化研究』17号, 37-61頁, 2014年3月)

4 加藤雄二“ John Bryant, Giorgio Mariani and Gordon Poole eds., *Facing Melville, Facing Italy: Democracy, Politics, Translation* ” (Roma:Sapienza Università Editrice, 2014),p 185-196.

(「雑誌論文」以外の論文)

1 柴田勝二「システムのなかの個人 村上

春樹・カフカ・オーウェル」(『世界文学としての村上春樹』東京外国語大学出版会、2015年、13-32頁)

2 加藤雄二「村上春樹と英米作家たち」(『世界文学としての村上春樹』同上、80-100頁)

〔学会発表〕(計 3 件)

1 柴田勝二「時空を超える者たち 村上春樹におけるメディアとメディウム」(第五回国際村上春樹シンポジウム、於：淡江大学、2014年6月14日)

2 加藤雄二“Meditations through Words 2Alone”, International Melville Conference ,June 4, 2013, Washington DC

3加藤雄二“(Un)differentiated

Difference: Identity, Temporality, and History in Edgar A. Poe and

William Faulkner,” Fourth

International Edgar Allan Poe

Conference, March 1, 2015,

New York,

〔図書〕(計 2 件)

1 柴田勝二『三島由紀夫 作品に隠された自決への道』(祥伝社、2013年11月)

2 柴田勝二・加藤雄二編『世界文学としての村上春樹』(東京外国語大学出版会、2015年2月)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

柴田 勝二 (SHIBATA, Shoji )  
東京外国語大学大学院総合国際学研  
究院・教授  
研究者番号：80206135

(2)研究分担者

加藤 雄二 (KATO, Yuji )  
東京外国語大学大学院総合国際学研  
究院・准教授  
研究者番号：60224549

(3)連携研究者

( )

研究者番号：